

特集 東日本大震災

vol.1 歯科医師らが見た現地レポート

3月11日(金)に発生した東日本大震災は、現地に甚大な被害をもたらした。地震発生後、テレビや新聞などのメディアは、被災地の行方不明者の身元確認や安否確認などを連日報道し、今回の震災による人的、経済的影響は過去最大規模といわれている。

地震やそれにもなう大津波、原子力発電所の事故、計画停電の実施など、いまだ困難が続いている一方で、日本はもとより世界各国が

らの支援活動も広がりを見せている。

そこで本特集の第1回目は、地震発生後に被災地での身元確認作業やボランティア活動を行った歯科医師らに、現地の状況についてご報告いただいた。また、本欄を通して「歯科医療従事者にできる支援は何か」について考えてみたい。

(新聞 QUINT 編集部)

被災地から本当の被災地へ

朴沢一成(宮城県開業)

身元確認作業の現場・石巻へ

3月11日(金)、未曾有の大災害発生後から3日目の14日(月)、重原 聡先生(神奈川県開業)からの電話が鳴った。

「先生!大丈夫?ご家族は?診療室は?」

矢継ぎ早の質問に「大丈夫です」としか答えられずにいると、「身元確認作業のボランティアとして協力したい」といわれた。まだ余震もあったため、「先生の安全が保障できないからやめた方が良い」という私の忠告にも一歩も引かない重原先生の正義感に後押しされるように、私も18日(金)から身元確認作業のための検視・検案に出かけることとなった。

重原先生、安岡さん(湘南デンタルケア勤務)がスタディクラブ「クラブ22」(主宰:小宮山彌太郎先生、東京都開業)の会員から提供していただいた救援物資を車に積み込み、東京を出発して仙台に向かっている頃、仙台の積雪量は10cmを超え、気温は氷点下3℃であった。明朝の最低気温は、氷点下5℃の予報とのこと。重原先生からは午前0時すぎの夜中に、仙台市街から10分ほど離れた私の自宅に到着した。

翌朝、午前8時に指定された宮城県警察本部に行くと、江澤敏光先生(宮城県開業、宮城県歯科医師会大規模災害対策本部身元確認班班長)が出迎えてくださった。江澤先生たちはすでに震災翌日の12日(土)には、利府町のグランディ21(宮城県総合運動公園)にて150体以上の身元確認作業を行っており、そのせいかすでに睡眠不足とストレスがたまっている表情であった。手短かにデンタルチャートの記

載方法を教えていただき、重原先生たちが持ち込んだ救援物資などを警察車両に積み込み、われわれは重原先生の車で遺体安置所となっている石巻旧青果市場に向かった。

遺体安置所中に響きわたる泣き声——想像を絶する身元確認作業現場

マグニチュード9.0という観測史上最大の東日本大震災は、各地に大きな爪痕を残した(図1~2)。石巻に向かう国道45号線は、あちこちで寸断されているとの噂があり、われわれは高速道路を北上。その高速道路も橋の手前と向こう端に大きな段差があり、地面が10cm以上沈下していた。午前8時に県警本部を出発したものの、時速50kmしか出せず、通常ならば1時間で行ける石巻まで1時間半も要したため、石巻旧青果市場には午前9時30分に到着した。

先述したグランディ21は、すでに300体以上のご遺体で満杯になったため、石巻旧青果市場がつぎの遺体安置所となったが、18日朝の時点ですでに300体を超えていた(震災2週間後には1,000体を超え、3週間後には1,500体を超えるご遺体を収容している)。現場は思いのほか室温が低く、作業の方々には辛い寒さではあるが、その寒さがご遺体を腐乱から守っ

てくれていた。

県警本部で江澤先生から説明を受けたデンタルチャートの記載方法と異なる箇所があり困惑したが、スタートせざるを得ない。冷え切ったご遺体は、死後硬直して口が開かない。スバチュラを差し込み、ゆっくりこじ開け、開口器を入れさらに開ける。

時折、警察官に案内されたご家族が訪れる。ご遺体が覆われたビニールをめぐった途端、安置所中に響きわたる泣き声に否が応でもわれわれの手が止まる。重原・朴沢組が担当したご遺体の1人には、2歳ほどの小さな女の子がいた。ご遺体にも微笑むような安らかな顔で横たわっているご遺体の身元確認作業を始めると、私の目にも重原先生の目にも涙が溢れ、検視・検案どころではなくなった。身元確認作業は3人1組で行ってもせいぜい1日平均20~30人ほどかと思われるが、今回の死亡者数の多さから見ても現場は想像を絶する光景であることはいうまでもない。

身元確認作業の現場には、被災者の一人でもある三宅宏之先生(宮城県開業、石巻歯科医師会)がボランティアとして参加されていた。三宅先生のご自宅は高台にあったので、ご家族は無事だったが、町中にある診療所は津波によって冠水したようである。身元確認作業の合間に重原先生が持参した支援物資を避難所に持って行った際、三宅先生のご自宅にうかがった。石巻港

を見下ろせる高台にあるご自宅は、波とその後発生した火災からもさわい逃れることができたが、庭から光景は言葉で表現できるものではなほど悲惨であった(図3)。

日中は少し日差しもあり、外に日は暖かくも感じたが、午後4時遅には底冷えがして体が震えた。朝ら行っていた身元確認作業の1日またたき間に終わりを告げようとした。

歯科医療者ができる支援とは

避難所には家族、自宅、仕事な何もかも失ったうえに、精神的なダメージを受けている被災者が多くと思われる。しかし、避難所の皆さまはこのほか元気である。というよ「元気を出して前を向いていくしかない」と自分に言い聞かせているよう感じた。また、1,000人以上の人1つの避難所に集まっているにもかかわらず、争う声などはまったく聞えない。われわれボランティアへの謝の言葉やねぎらう言葉ばかりで、むしろ私たちが被災者から励まされた。

命をつなぐ支援物資は十分の必要ある。これからは今後の生活を支援が必要だろう。われわれ歯科医療者ができることは何か——。また人、身元不明のご遺体のご家族の元に帰っていくなか、答えを見たい自分がいた。



図1 地震によって破壊された橋。



図2 津波で湖と化した線路周辺。



図3 石巻周辺はほぼ全壊となっている。

読者の皆様へ

さる3月11日(金)に発生した東日本大震災により、現地は甚大な被害となっております。被災された皆様、およびその関係者の方々に対しまして、謹んでお見舞い申し上げます。また、被災地の1日も早い復興を、社員一同心からお祈り申し上げます。

クインテッセンス出版株式会社では、今回の地震で被災された皆様の支援活動のための義援金として1,000万円の支援を行うことを決定し、すでに日本歯科医師会が開設した義援金口座に寄付させていただきました。また、今後も出版活動を通して引き続き支援を行っていく予定です。

なお、『新聞 QUINT』では、震災に関する情報ならびに現地の被害状況などを継続してお伝えしてまいりますので、読者の皆様におかれましても震災に関する情報ならびにご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

クインテッセンス出版株式会社